



<旅の始まり>

今から半世紀も前になるのだろうか、「天国にいちばん近い島」と騒がれた、今のシニア世代の当時の憧れの島を、あの頃の想いを呼び戻し、私の所属する自然大学の有志 8 名で昨年 12 月に訪ねた。リーダーの K 氏は、現役時代、多くの国での駐在員を経験し、英語も堪能で、世界旅行の経験も相当に豊かであることから、彼にすべてお任せの旅となった。

成田空港を昼にエアカラン航空機で発ち 8 時間 30 分かけて夜遅くにニューカレドニアのヌメアに到着。翌日から、市内観光、ウベア島散策、リビエラブルー及びグランドフュール州立公園トレッキングと旅程をこなし、機内泊した翌朝に成田に帰着した 4 泊 6 日の旅であった。次に旅の記録を、写真を交えてまとめてみました。

<美しい街並みに熱帯のカラフルな花>

夜遅く、ヌメアのホテルに入った。朝、目覚めると眼前に海が広がっていた。ホテル前のアンスタバービーチは松林ではなくココヤシの木が並んでいたので南国に来たのだと実感した。ニューカレドニアは南太平洋の西南部メラネシアに位置しており、1774年にキャプテンクックによって発見された。本島のグランドテール島は面積がほぼ四国と同じだ。その西側には多くの小島が点在し、その中に森村桂の旅行記「天国にいちばん近い島」のモデルとなったウベア島もある。人口27万人で、殆どはカトリックもしくはプロテstant教徒。メラネシア、ヨーロッパ系、アジア系など様々な人種が共存するまさに異文化が混じりあった土地で、1853年にフランス領となったために住民はフランス国籍を有している。

この旅のガイドは日本で生まれ育ったフランス人のアンリさんにしていただいた。街を歩いてみた。白壁のモダンな街並みが続く。それぞれの建物の庭には熱帯のカラフルな花が咲き乱れていた。その中でも、真っ赤な花を無数につけたホウオウボクは際立っていた。真っ白で中心部がレモンイエローのプルメリアや黄色のアマランダの花もとてもきれいであったし、馴染みあるハイビスカス、ピンクや橙色のブーゲンビリアなど世界からカラフルな熱帯系の花を集めているのだろう。外来種が圧倒的に多いと思われるが、この町に馴染んでいる。おしゃれなパリと南仏の風光

明媚な保養地があるコート・ダジュールを融合したような香りがする街並みは南太平洋有数のビーチリゾートと表現されていた観光パンフレットにも頷ける。私たちはこの町のヌバタホテルに4日間滞在し熱帯の町と海と森を満喫した。





ヌメアの町で

<ニューカレドニア・ラグーン水族館>

シトロン湾傍のラグーン水族館を覗いてみた。この水族館は、循環式ろ過装置を使わず、直接ラグーンの海水を引き込んでいる。島周辺で見られる生物のみを展示しているので、フランス語の解説板が読めなくても、見るものすべてがこの島の周りに生息しているのだと考えればよい。展示は、①マングローブの海、②ラグーン【コーラル・リーフ（サンゴ礁）の内側の海】、③外洋【コーラル・リーフ（サンゴ礁）の外側の海】とそれぞれの生息環境別にされていた。フェフキダイやボラ、シマイサキ、カゴカキダイ、ハタタテダイ、ツバメウオは日本でも見られるものである。ナポレオンフィッシュはどこで見ても迫力がある。面白いことにシオマネキは日本と違ってとてもカラフルな色をしていた。ベニシオマネキというらしい。



ベニシオマネキ

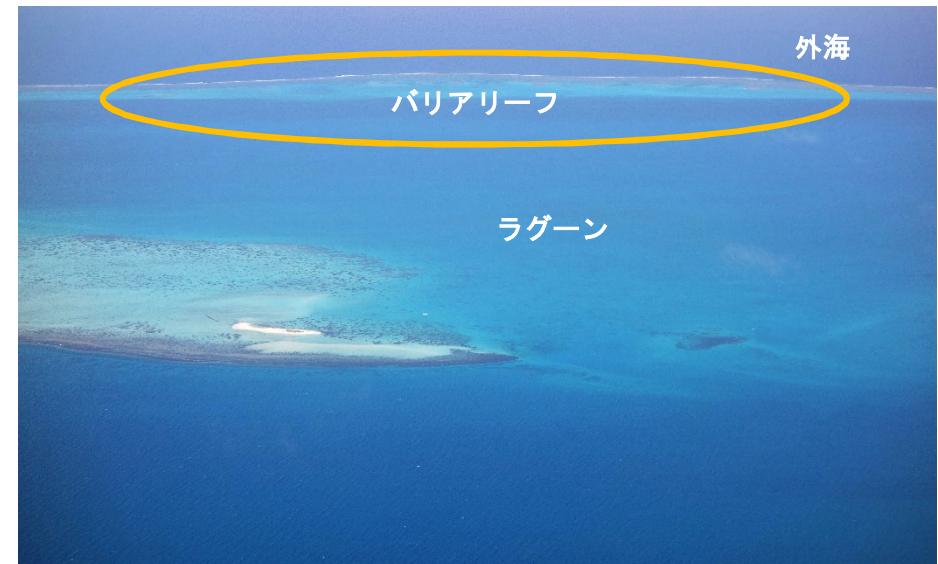


ハタタテダイ

<天国にいちばん近い島・ウベア島へ>

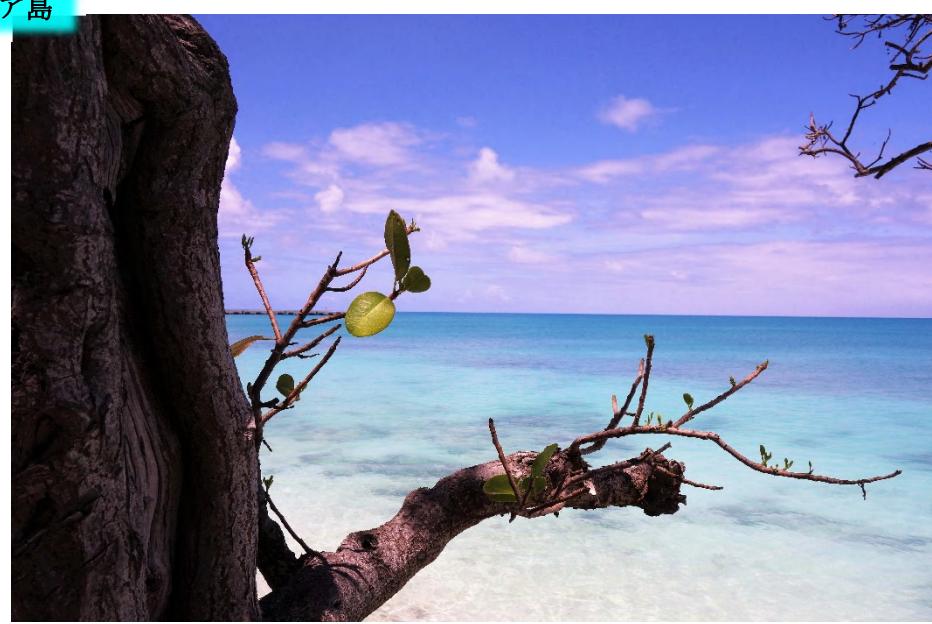
ニューカレドニアにはオーストラリアのグレイトバリアリーフについて世界で 2 番目に大きいバリアリーフがあり、世界遺産になっている。バリアリーフはサンゴ礁の形態の一つであり、島から少し沖合に島を囲むようにできているので渚からは見えにくい。それが、ヌメアからウベア島に向かう飛行機からはその様子が非常によくわかった（次ページ写真）。島に張り付くようにできたサンゴ礁は、幾年もかけて沖へと成長していくが、その過程で島が沈降したり、海面が上昇したりして島とサンゴ礁の間に静穏海域が生まれる。これは堡礁（ほしょう）ともいわれ、その内側の海をラグーンという。さらに地質活動が進行すると、島は完全に水没し周りのサンゴ礁だけが残る。これを環礁という。約 35 分でウベア島に着いた。人口約 2,500 人の島。一面ココヤシに覆われていた。ここには石鹼の原料をとるためのヤシ搾油工場があるらしい。海に出ると 20km もの白砂のロングビー

チが見えてきた。真っ白な砂に日本ではお目にかかる色の海が延々と続く。その中でも絶景はムリ橋近くの海（表紙写真）。干潮時に広がる真っ白の砂洲と水色、青色、瑠璃色、紺色と変化するラグーンの海は見事である。海が多様な色を見せてくれるのには理由がある。サンゴが風化して細かく砕かれた真っ白な海岸。波打ち際はこの海岸の砂の色が反映されて白っぽく見える。一方、沖合にできたサンゴ礁（堡礁）よりさらに外海は水深があるためか、太陽光の中の赤系の光が吸収されて届かない一方青系の光だけが深く到達するために真青の海となる。この両者に挟まれた波静かな比較的浅いラグーンは真っ白の海底とその海の深さに応じて、いわゆる白～青にその混合色を含め、横文字で言えばターコイズからコバルトブルー系のバリエーションに富んだ色の海が現れる。気がつくと夢中でカメラのシャッターを押し続けていた。





ウベア島



<透き通るような水>

あまりにもきれいな海なので水中眼鏡を付けてシュノーケリングをした。真っ白な砂と透き通る海が続く。やっとのことで魚一匹みつけた。ユゴイの仲間だと思う。透明度が極めて高い。プランクトンが少ないので想う。貧栄養の海だ。ご存知かもしれないが、熱帯の海は概して栄養が少なく豊かではない。それに較べて北の海は栄養豊富で豊かな場合が多い。これは寒冷地域では表層水が冷やされて沈降し、底にある栄養豊富な海水と上下混合するからである。熱帯の海は表層水が暖かいのでそうはならない。さらにここは大きな大陸が無く、小さな島々なので陸域から栄養塩の流入も大きな期待はできない。そんな中で生き物はどのようにして生きているのだろうか。

この海の代表的な生物、造礁サンゴは体内に光合成を行う褐虫藻（微細な単細胞藻類）を取り込んでそこから栄養分（光合成産物）をもらっている。一方、褐虫藻もサンゴから光のある場所に棲みかを提供してもらうと共に代謝産物である窒素やリンをいただいている。いわゆる共生関係である。サンゴは海水中の二酸化炭素やカルシウムを取りこみ、炭酸カルシウムを主成分とした骨格をつくる。たくさんの造礁サンゴが生命活動を行った結果、サンゴの下には厚い石灰岩の層ができ、サンゴ自身はさらに上へ、沖へと成長する。リーフ（礁）の外側は急に深くなっており、波も高いが、リーフに囲まれたラグーンは、リーフが波浪を止める天然の防波堤となるため波が穏やかである。サンゴや褐虫藻の代謝産物も周囲の微生物の餌となり、サンゴのすき間は小さな生物の隠れ場所に都合がよく、それらを捕食する大型動物も集まってくる。砂浜やアマモ場もできるので、サンゴ礁には実に多様な環境が作られ、多種類の生物が生息し、生物多様性の観点からも重要な場所となる。砂漠の中のオアシスのようなものかも知れない。

<固有種の多い森をトレッキング>

素晴らしいのは海だけではない。ここには多様な森もある。最初にトレッキングしたのはリビエラブルー州立公園。登るにつれて山の地肌が赤くなってくる。今までに見たことがない独特の景色である（次ページ写真）。ラテライトという熱帯特有の土壤で、降雨により有機物が溶脱し、赤色の酸化鉄が集積した酸性土壤である。樹木の生育条件としては良くなく、低木の疎林地帯が続く。しかし、面白いことに高度が下がって、土壤に水分を含む環境ができると熱帯ジャングルとなる。この変化が実際に面白い。そして、このジャングルでニューカレドニアを代表する鳥、カグーに出会ったのだ。希少種ということで、見られないと思っていたがいとも簡単に出てきてくれた。それにはちょっとしたアンリさんの知恵があった。彼は盛んに木の下の腐葉土を掘っている。そこへカグーたちが茂みの中から集まって来た。どうやらその中のミミズを狙いに現れたようだ。この鳥は飛べない鳥、飛ぶ必要のない鳥だ。これにはちょっとした進化上の理由がある。ニューカレドニア島はかつてのゴンドワナ大陸（過去に存在した巨大な大陸）から共に分離したオーストラリアとは 8500 万年前に離れ、さらに 5500 万年前はニュージーランドとも離れたとされている。オーストラリアと分離した時にはコウモリ以外の陸生在来哺乳類は存在しなかった。それ以降独自の進化を遂げ



て固有種が多くなった。初期の爬虫類から進化し始めたばかりの鳥類は独自の進化を遂げ、天敵がないために飛ぶ力が無くなった鳥が誕生したわけだ。そこへ人間が放した哺乳類に捕食されるなどして絶滅が危惧される状態となった。しかし、捕獲されたカグーの飼育プログラムが1977年から実行され生息数が増加傾向にあるという。なお、そのプログラムには横浜の野毛山動物園も参加しているとのこと。

翌日にトレッキングしたのはグランドフジエール州立公園である。昨日とは違って、土の質が幾分よいようで赤い色をしていない。木の茂り方がまるで違う。土も露出していないくて腐葉土があり、全山大木で覆われていた。標高約700m程度まで山歩きを行った。大シダなどの固有種の他にニワウリの木をよく見かけた。この葉には殺菌・抗菌作用があり、昔から万能薬として重宝されている。今は、主にアロマ用として精油されたものが市販されている。



鉄分の多い赤土土壤



水没林



シダの大木

<ニューカレドニアで感じたこと>

カラフルなのは魚にとどまらず

海の色がバリエーションに富むのは前述したことから一定納得できるのだが、魚体のカラフルさはどうしてなのだろうか。今回、シュノーケリングした砂浜海岸ではカラフルな魚は見つけることができなかったが、水族館でのサンゴ礁に生息する魚の展示からは、自然状態でもサンゴ礁のある所にはカラフルな魚がいることは間違いない。熱帯の海はここに限らずどうして色鮮やかな魚になるのだろう。カラフルさがかえって保護色になるとか、紫外線が強いのでそれに影響を受けないようにカラフルな色をつけるとか、色々な説があるようだが、狭い範囲の海域にあるサンゴ礁には、様々な種類の生き物が生息しており、水も透明で、カラフルな色はその中から自分の仲間や配偶者を識別するためであるという説を信じたい。ところで、カレドニアは魚だけがカラフルではなかった。街中に咲く花とてそうである。マルシェではカラフルなフルーツをたくさん見た。さらには露天市場に

出回っている衣類だって、アクセサリー、タオル、容器、小物品まですべてにわたってそうなのだ。トロピカルという言葉がある。辞書を引くと「熱帯的である様のこと」と書いてあった。そもそも熱帯的ということがわからない。何かのきっかけで人々にうけるイメージが出来上がったら、それをさらに拡大・発展させる傾向があるのだろうか。まさに街中に咲いているカラフルな花は大半が他所から持ってきたものだ。そして、人を着飾る服を始め身の回りの品物もそういうものが格好いいもの、この町に似合うものとして定着していったのだろうか。他の熱帯の町も観察したくなつた。



独立運動など

1985年頃から激しい独立運動が吹き荒れ、死者も出たと聞いている。その後1989年にマティニヨン合意、1998年にその合意を補完するヌメア協定が結ばれ、「特別共同体」となり他のフランスの海外領土よりも自治権が拡大され、内政に関する権限はほぼすべて譲渡された。この中で昨年の11月に独立の是非を問う住民投票があった。結果は反対が56%で独立は否決された。協定ではあと2回（2020年と2022年）同様の投票の実施が約束さ

れている。ガイドのアンリさんの感想だが、後2回実施すれば逆転するかもしれない。彼はその時はここを離れると言っていた。街には立派な住宅が立ち並ぶのでさぞかし豊かだろうと思っていたが、それはフランス人の住居なのかもしれない。観光で来ている我々には先住民カナックの生活は全く分からぬ。(参考 2014年国勢調査：カナック 39.1%、ヨーロッパ系 27.2%)

その他

物価が驚くほど高いのである。物資の輸送にコストがかかる島の宿命なのだろうか。コーラが約350円、普通の食事一回が2,500~3,000円程度。また、アルコールは金曜日の昼から日曜日まで飲食店以外では買えない。というのも、飲酒運転による事故が多発していてその防衛策とのこと。

ところで、先住民カナックは男女を問わず大人はよく太っている。ガイドさんによれば彼らの主食の芋は畑で多くの時間を費やさなくともたくさん収穫できるという。余った時間はあまり働くことなく寝転んでいる人が多いとか。そのためか肥満となり糖尿病が島民病となっているらしい。



先住民 カナック



左：トレッキングのランチ

中央：ウベア島でのランチ

右：天使のエビ。日本のクルマエビより美味しい！

森村桂の旅行記に示された花が咲き乱れ、果実も豊富で、教会がたくさんあり神様にも近いことは納得できた。また、トレッキングで蚊やハエはいても人に危害を加える獣などはいないこともわかった。そして、あまり働くなくても飯が食えるとなればそんな生活に憧れがあつてもおかしくないだろう。もっとも島での生活体験が無いので何とも言えないが…。しかし、周りを取りまく海は、「この世にこんな素晴らしい景色があるのか」と思うほど美しいので、ラグーンの彼方に天国に登る階段があるようにも感じた旅であった。



沖のバリアリーフが自然の防波堤となり海は驚くほど穏やかであった（ヌメア・アンスタバビーチ）